
ハヤテのごとく! チートでドSなお姉さん

楚良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！ チートでDSなお姉さん

【Nコード】

N0569T

【作者名】

楚良

【あらすじ】

ある日突然やってきた新任の先生。

それは誰もが知るチートでDSな元生徒会長だった。

彼女がハヤテ達を面白おかしくひっかきまわす！

プロローグと言つ名のサブタイトル

あなたは知っているだろうか。

世の中には、ものすごいお金持ちで、天才がいる事を。

あなたは知っているだろうか。

世の中のお金持ちが通う、超エリート学校を。

この学校にある1人の女性がやってきた。

年齢19歳、超天才、運動神経抜群。

しかも美人と言った才色兼備な人間だ。

「知ってる？今日、新任の先生が来るんだって」

彼女は現生徒会会長「桂ヒナギク」15歳。

苦手なところは高いところ。

これまた才色兼備な生徒会長である。

「そつなんですか？でも、桂先生が」

「どうせ副担任に降ろされたんだろ。それに私達にはあまり関係のないことだ」

童顔の少年は「綾崎ハヤテ」

金髪の少女が「三千院ナギ」だ。

この2人はニートでゲーマー、おまけにオタクで1億5000万の借金を肩代わりした少女と、童顔で鈍感、手先が器用で運動神経抜群なのに1億5000万の借金を背負った少年の、主人と執事な関係なのだ。

「なんか今、ものすごくむかつくと言われた気がするんだけど」

「奇遇ですねお嬢様。僕も今同じこと思ったんですよ」

身の危険を感じるので説明はこころ辺で終了。

とりあえず、お嬢様と借金執事なのだ。

「ほら、席に付きなさい」

ここでお金とお酒が大好きなダメ先生「桂雪路」が声をかける。

その声に従い、教室で立っていた生徒が席に着く。

「今日から新任の先生が来たわ。私は悲しい事に副担任。とりあえず紹介するから、入って」

がらっ、とドアを開ける音がする。

ドアの向こうからは白銀の長髪を三つ綱にして揺らし、コツコツと足音を鳴らして教卓の前にやってきた。

「みなさんこんにちわ。今日からみなさんの担任になった」

誰もが驚いていた。

なんでこの人がいるのか、と。

まあ、この学校ではある意味有名だったので知らない人間はいない。絶対一度は見たことが有るのだから。

「愛沢蓮です。よろしくね」

プロローグと言つ名のサブタイトル（後書き）

どうも、作者の楚良シュラです！

もう勢いだけでやっていくつもりです。

でも、出来るだけ完結目指して頑張りたいので応援よろしくお願ひします。

今回はとりあえずキャラ紹介です。

キャラ紹介はあとがきで書くと見にくいから嫌だ（b y 駄作者

名前：愛沢（紅葉）蓮^{あかは}_{れん}

性別：女性

年齢：ぴちぴちの19歳

性格：天然を装ってはいるが実は腹黒でドS

身長：168？

体重：ひ・み・つ？

誕生日：4月15日

血液型：AB型

好き、得意：何でも、料理、剣道、策略、他いろいろ

苦手：G

容姿：ぶつちやければアチャ子。

白銀の髪を一本の三つ網にして、真紅の瞳。

備考：

本作の主人公兼ヒロイン。

天然な性格を見せているが実は腹黒でサドスティック。

ハヤテや他の生徒をからかうのが最近の楽しみ。

爆弾発言やいろいろな事を言っただけをひっかきまわし『人たらし』や『爆弾魔』などと呼ばれることがある。

ヒナギク達が入学する1年前の前生徒会長。

超天才でさらに18ヶ国の言葉を喋れ、フリギア語も喋れる。

しかも運動神経抜群でハヤテやヒナギクでも敵わない。

なので誰からも頼られる才色兼備な人間だった。

マリアの次に1年で生徒会長になった人間であり、一日入学や、学校説明会的なものなどで今の1年生は全員が顔を知っている(忘れられない)。

現在はハヤテ達のクラスの担任。

王玉を持っていてアテネとも知り合い。

「愛沢」の性を持っており、咲夜達のお姉さん。

本名は「紅葉蓮」だが両親の死後、幼い蓮を養子として愛沢家に引き取ってもらった。

それ以降は「愛沢蓮」と名乗るようになる。

ハヤテにも一度会った事がある。

何故だか謎の英霊の加護を受けていて、さらに「名刀・雪片」を持つ文字通り最強の人物でもある。

真剣術「紅葉流」の後継者にして最後の仕様者。

ぶっちゃけチートなのでたいいの事が出来る。

伊澄の真似ごと(まがい)も出来たりする。

料理の腕もハヤテ以上だったり、頭脳が牧村先生以上だったりやっぱチートなお姉さん。

ハヤテを自分に振り向かせるためにいろいろやるが、やはりドSなのでそんなことはなく、わざとこういうことをやってみんなの反応を楽しんでる。

キャラ紹介はあとがきで書くと見にくいから嫌だ（b y 駄作者（後書き）

編集する可能性があります。

と言つか絶対編集すると思います。

変な部分があったらいつてください。

即座に直したいと思います。

第01話 天才でお姉さんで天然でDSで・・・etcetc

「さて、早速なんですけどみなさんにテストをしてもらいます。そんなに難しくないのでね。みんなの実力を見るものだから」

そう言っただけからかテスト用紙を取りだす蓮。驚き気味なクラス全員なんてほぼ無視だ。

「じゃ、はじめて下さい。制限時間は1時間」

配られたプリントを黙々と解き始める。

蓮が言った通り、そんなに内容も難しくもなく。今まで習ってきたものばかりだった。

（1時間後）

「はい、終了」。後ろから集めてきてね」

全員の答案を回収してパラパラとめくる。そして意外な言葉が出てきた。

「へへ、やっぱりみんな頭いいね。一教科の平均が87.7か」

「え？」

「あ、あの先生、何してるんですか？」

「ん？みんなの合計点数と、平均点数を出したんだよ？それでも、

苦手なのはあるみたいだね。綾崎君は英語とかが苦手なのかな？長文が間違い多いけど。瀬川さんと朝風さんは数学のケアレスミスが多いな。ここで間違えちゃうと期末大変だよ？他にも、みんないろいろ苦手なのあるみたいだね」

さすがは天才と言わんばかりのコメント。
的確すぎて誰も声が出ない。

「これは後で丸付けして返すから。ちゃんと間違えた部分は出来るようにしておくこと。じゃ、桂先生、後はお願いします」

そう言っただけまたすたすたと教室を出ていく蓮。
みな、何故かだんまり、と言いか声が出せずにいた。
驚きの連続が続いたせいも、一部の男子は見とれているヤツさえいたほどだ。

「あ、忘れてた。綾崎君と三千院さんは後で職員室で私の元へ来るように。早めに来てね」

この日から一味違う楽しい学園生活が始まった。

side out

「ねえねえ、愛沢先生って」

「うんうん、去年のあの人だよ」

教室は蓮の話題でいっぱいだった。

当たり前だろう。

みんなあの顔を忘れられなかったのだ。

「まさか、蓮姉が新任の教師だったとは……」

「ビックリですね」

場所は変わって廊下。

ハヤテとナギは蓮に呼ばれていたので現在職員室に向かっている途中だ。

ハヤテにいたっては他の男子に羨ましがられていた（呼び出しをくらった事を）。

「ハヤテ、あつた事が有るのか？」

「はい、一度だけ。前の学校の時にあつたんです」

（回想）

「ああ、遅刻しちゃう！急がないと！」

この日、ハヤテは珍しく歩きだった。

何せ、使っていた自転車がどぶにハマリ、さらにはチェーンが外れ、置いておいたら車にはねられて壊れた状態なのであったから。

「急げ急げ！」

「おっと」

「うわっ！」

まさしく、みなさん知っての通りハヤテは不幸体質。
人にぶつかったりするのは別段不思議じゃない。
なので今回は人にぶつかった。
しかも女性。

「・・・あ」

「・・・へ、君、初対面の人に対して結構大胆なことするね」

「う、ごめんなさい！わ、わざとじゃないんです！」

今回はちょっとだけ運がよく、倒れてどぶに落ちたりすることはなかった。

だがある意味での災難がハヤテを襲う。
そう、胸に顔を押し当ててしまっていたのだ。

「あ、どうしようかな、ここで叫んだら君、捕まっちゃおうよ？
痴漢行為として」

「ええ！？いや、本当にそれだけは！」

その場で即座に土下座。

ここで警察なんか呼ばれた完璧に遅刻だ。

「なんて、冗談よ冗談。ほら、立てる？」

「え？あ、はい（うわあ、改めてみるときれいな人だなあ）」

「特別に近道教えてあげる。そこの角を曲がったらまっすぐ行くと

いいわ。そうすれば君の行きたいところに行けるはずだから。ま、道を間違えなければね」

「あ、ありがとうございます！僕、綾崎ハヤテって言います！」

「くす。私は蓮。愛沢蓮よ、またどこかで会おうね、ハヤテ君」

〈回想終了〉

「つてな感じです」

「お前！蓮姉の胸、触ったのか!?!」

「え、えつと、じ、事故ですけど一応」

「こんの、浮気者があ!?!」

「のわああ!?!」

無論、そんな事を言えばナギの怒りを買うのにハヤテは学習をせず、今回も毎度同じくと言った感じでナギの怒りを買ったのであった。

ちなみナギが今回使った武器はグラー アイゼンであった。
フォームは無論、ラケーン。

side out

「私、早めに来てって言ったの覚えてるかな？」

「は、はい……」

職員室。

先に行ってしまったナギの後を追い、やってきたハヤテ。だが肝心のナギはおらず、とりあえず蓮の元へやってきた。

「もく、ナギとの用事は済ませたからいいけど。もし後数分でも遅れてたら減点してたよ？」

「そ、そう言えば、お久しぶりですね」

「そうやって話をずらすのかな？1億5000万の借金を背負った少年執事の綾崎ハヤテ君」

「うう……、何で知ってるんですか……」

「それは咲夜が毎回楽しそうにハヤテ君の話をしてくれるからよ。さ、無駄話は後にして。どうして呼んだかわかる？」

「いえ、まったく」

「きつぱりと言うのね。そう言うの、嫌いじゃないわ。今回呼んだのは」

何故か無駄に間を開けてくる蓮。

その言葉にハヤテだけでなく、職員室の教員全員も息をのむ。

「あれ？なんだっけ？」

ドテッ！！

全員がずっこける音が盛大に聞こえた。

「ちょ、何で忘れるんですか！」

「ゴメンゴメン。えっと、あ、あった。ハヤテ君、一番成績が微妙だったから、これ、今週中にやって私に出してちょうだい」

手渡されたプリントの束（10枚ぐらい）の一番上には「蓮ちゃん特製 勉強の秘訣」と書いてある。
え？何これ？みたいな顔をしていたハヤテを見て蓮は少し笑っていた。

「それ、ちゃんとやれば力付くから。しっかりやること」

「は、はい」

「わからなかった誰かに聞いてもいいわよ。その代わりに、ちゃんと頭に入れないとダメだからね？いい？」

「わかりました」

「ちなみに次の時間、体育だけどぼーっとしていいのかな？」

「え？」

時計を見た瞬間ハヤテは凍りつく。

時間と言えば、もうすでに始まっていて10分ぐらいたっていた。
怒られること間違いなしだろう。

「何で早く言ってくれなかつたんですか!？」

「だから、時間なかつたから早く来てつて言つたんだよ。なのに遅く来るから・・・全部、とまでは行かなくてもほとんどハヤテ君自身が悪いんだからね？」

「た、確かに」

「ほぐら、早くいかないとナギみたいにサボりとみなされるわよ。後で見に行つてあげるから」

「・・・わ、わかりました。では」

そう言つて職員室を後にしたハヤテであった。

第01話 天才でお姉さんで天然でDSで・・・etc etc (後書き)

はい、1話目でした。

ちなみにこの小説では1〜5話ぐらいで1日を終わらせたいかなと思ってます。

短い時はもうホントに短く1話で終わり、長い時はホントに長くもしかしたら5話以上続くかもしれません。

アイデアや、ネタ、こんな展開がほしい！とかがあれば感想の所に書くか、メッセージを下さい。

可能な限り本編に取り入れたいと思います。

最後に誤字脱字、感想もあればお願いします。

第02話 美味しい展開。それはフラグの塊さ！

「おー、やってるやってる」

ハヤテが体育の時間に遅刻してからの事。
準備運動を済ませ、早速やっていた。

「あ、愛沢先生」

「別に先生付けなくていいんじゃないですか。私、ここの卒業生ですし。同じ先生ですし」

「ああ、だったら愛沢、何しに来たんだ？」

「いや、これでも全教科担当なんで。様子見ってやつです」

「そういえばそうだったな」

説明を忘れていたが、これでも蓮は全教科担当。

新任だが生徒会長の時の有能さを見かねた理事長がそう指示したらしい。

ちなみに授業に出れない場合は他の先生に行ってもらおうらしい。

「さて、私も混ぜてもらおうとするか」

この後、予想だにしない事が起こることをまだ誰も知らなかった。

side out

「お〜い、私も混ぜて〜」

気軽なノリでバスケをやっていたグループへ顔を出す。
もちろんそこにはハヤテ達が出た。
しかも、今回は合同なのでヒナギク達も居る。

「あ、蓮さん」

「およ？三千院さんは？」

「えっと、お嬢様は保健室でフテ寝中です」

「・・・よし、戻ってきたら説教ね」

無論、満面の笑顔でこの発言。

おっかなすぎるのだが、一部の男子には「説教されたい」なんて思っている変態がいたことには目を瞑らなければいけないのだろう。

兎にも角にも蓮はヒナギクチームへ。

もともと、ハヤテチームとヒナギクチームの2つでやっていて、1人余っている状態だったのでちょうど良かったのではあるが・・・。

「ほらほら〜、私歩いちゃってるよ〜。頑張ればとれるからかかってきなさい」

現在絶賛無双中。

バスケで歩くななんて聞いたことが無い。

片手でドリブルをしながら向かってくる生徒をあしらっていく。

やはりここでも男子生徒は「事故に見せかけてなんかしよう!」と言った考えを持った愚か者がいたが、やはり敵うわけもなく。ボデイツッチはおるか、ボールにすら触れないと言う悲しい現実を突き付けられて打ちひしがれていた。

「ほい、ヒナギクパース」

「おわつと、任せてください」

ここで、ボールをヒナギクへパス。

一旦休憩だ。

だが、やはりヒナギクも蓮程ではないが運動神経がいい。ぶつちやけ、スケベな男子など敵ではない。

唯一の敵はハヤテだ。

「もらい!」

「あ!」

油断大敵。

あっけなく取られてしまった。

しかしその向こう側には

「つてあれ?」

「ふっふっ、執事も油断大敵だよ?」

蓮がいた。

いや、ハヤテがやってきたと言ったほうがいいだろう。

これまたあっけなく取られ、ボールは再び蓮の手の中へ。

「くっ、さすがですね」

「いや、これくらい朝飯前だよ？なんなら本気出そうか？」

「奇遇ですね。僕も本気を出していないんですよ」

「そっか。じゃあ、本気出そうかな」

「は？」

棒立ちだった蓮は足を曲げ、前傾姿勢になった。

それはまさしくプロの姿勢。

文字通り、本気を出す気らしい。

それに対してハヤテも本気を出す。

まわりからは「何この空気？」なんて言葉が飛んできたが2人は気にしてない。

というか、気にしたら蓮なんか恥ずかしくて死んじゃいそうになるのでやめておく。

そして、蓮はある行動に移った。

そう、パスだ。

この状況からのパスなんて、「お互い本気を出しといてそりゃないだろ」等の言葉が飛んでくる。

だが、それはあえなく失敗に終わった。

「「あ」「

ハヤテの股を抜いてパスをしようと思って下にたたきつけたのだが、

手が滑ったか、それともわざとなのか。
わからないが、ハヤテの片足に思いつきりぶつかった。
ハヤテにとってはそんなに痛くなかったのだが、あいにく場所が悪かった。
バランスを崩しそのまま

「「あ……」」

ハヤテが蓮を押ししたす状況の出来上がり
かなりやばい状況且つ、お互いすごく恥ずかしい。
それなのに何故か動けない。

「え、えつと……」

「す、すみません……」

「う、うん……」

とりあえず謝っておく。
だけどやっぱり動かない、いや、動けない。

周りからの視線がどんどん酷くなっていく。
男子なんて「俺と代われ!!」なんて目でハヤテを見てくる。

「あ、あの、ハ、ハヤテ君」

「は、はい!」

「その、どいてもらえると……嬉しいんだけど……」

「あ、すみません！すぐどきます！」

ここでやっと動いた2人。

立ってお互いに見合うのだがやはり恥ずかしい。

これが思春期と言つものなのだろうか。

ちなみに

「ハヤテ（君）」

「はい？」

この後ハヤテが一部の女子と男子、両方にフルボッコにされたのは
当たり前のことであった。

その叫びは白皇学園全体に響いたとか響かなかったとか・・・。

第02話 美味しい展開。それはフラグの塊さ！（後書き）

さて、後何話ぐらいで1日が終わるかな（笑）

なんにせよ、ネタが無けりや書けないわな。

ちなみに現在は、と言うよりずっと「こんな展開がほしい！」とか、「アイデア、ネタが思いついた！」って人は遠慮なく教えてください。

可能な限り本編にねじこみたいと思います。

最後に誤字脱字、感想あればお願いします。

第03話 さあ、みんなで叫ぼうー！トッラ ザムー！ー！（前書き）

今回は戦闘の回です。

いやー、蓮さんマジチートッス！ー！

さすが姉さんだね！

口のうまさもパないッス！

第03話 さあ、みんなで叫ぼう！トラザム！！

「さて、もう放課後か・・・」

ハヤテがみんなにほこられた後。

体の頑丈さが幸いし、大事には至らなかったので普通の授業をしていた。

で、結局あれ以外は何もなく、本当に普通の一日になってしまった。

「先生つてのも結構疲れるものね。全教科はさすがにきついわ」

「蓮さん、帰っちゃっていいんですか？」

「え？なんで？」

ちなみに現在帰宅中。

と言ってもまだ白皇敷地内だが。

ナギとハヤテの3人で歩いている。

「だって蓮さんは教員でしょう？仕事、残ってないんですか？」

「え？全部終わらせたけど？」

「・・・は？」

「やめとけハヤテ。蓮姉はこれが普通なのだ」

「そそ。お姉さんは天才だからね。みんなが時間かかるようなことも、すぐに終わらせることが出来るのだよ」

「そ、そうなんですか・・・」

そんな話をしている時だった。

辺りが突然揺れ始める。

まさしく、地震だと勘違いしそうなくらい大きい。

しかし、地震なわけもなく。

眼の前に巨大な・・・ロボット？

「ねえ、ナギ。これなんてガン ム？」

「これはエク アじゃないか？」

「ふ〜ん、日本も技術が進歩したのね。しっかり N粒子も出てる。しかし、なんでエ シアがここに？」

こんな疑問の声を上げた時だった。

何処からか、あの聞き覚えのあるようなないような片言の声が聞こえた。

「H A H A H A ! ! 見マシタカ！コレゾ私ノ友人ガ作り上ゲタ ク シアデース！！」

巨大ロボットの肩に乗っている外国人が叫んでいた。

そう、彼の名はギルバート。

三千院家の遺産を狙ううちの1人であり、さらには咲夜と蓮の義理の兄だ。

ちなみにこのギルバートは第2のギルバートである。

そして、眼の前にある巨大ロボット。
サイズは少し違うがまさしくガダムエクシだ。
実体剣を持つてるあたりがリアルで怖い。

「義兄さん・・・何してるの・・・？」

「オオ！コレハマイシスター！奇遇デスネ！！」

「ハヤテくん、説明できる？」

「えっと、三千院家の遺産相続の条件が”ナギお嬢様に泣きながら謝らせる”と言う何ともわからない条件でして。で、それ以降お嬢様を狙う輩が後を絶たないんです」

「そう・・・。義兄さんは私の妹を泣かせる気なの・・・？」

「YES！ソレガ遺産相続ノ条件デスカラネー！」

「ハヤテ君、ちょっと時間稼ぎできる？義兄さんを懲らしめてくるから」

「え？ああ、はい、出来るだけ頑張ります」

お互い準備が整ったようか、ハヤテとエクアは構えた。
そして何故かコクピットからあの聞きなれた？声が聞こえる。

『刹・F・セエイ。三千院ナギを泣いて謝らせる』

「おお！まさか 那までいるのか！？会って握手をさせる！」

この声を聞いた途端、ナギは1人テンションを上げていた。
いや、まあ、オタクな彼女であるならわからないでもないだろう。

とえりあえず、肩の方を見てみた。

さっきまでいたはずのギルバートがいないではないか。
で、横を見てみると・・・。

「さあ、義兄さん。早くあれを止めて頂戴。もし本当にナギが無いたら義兄さんの顔が酷い事になっちゃうからね？」

「や、ヤメテクダサイーイ！マイシスター！謝リマスカラ！！」

めちゃくちゃ笑顔の蓮に顔を踏みつけられているギルバートがいた。
いや、いつの間際に落として踏んでいたのだろう。
姿がちよつとも見えなかった。

「ちょ、振り向かないでよ！そうやって私のスカートの中のパンツ見る気！？」

「チ、違イマース！ソレニ、アナタ、スパッツダカラパンツが見エマセーン！！」

「どつちにしろスカートの中覗いてるじゃない！！この変態！！」

今、完全に墓穴を掘ったギルバート。

そして一瞬見えた、ニヤリと言った顔をしていた蓮は恥ずかしい顔
をしながらギルバートを全力で蹴り飛ばす。

これで、エク アを止める術はなくなつた。

いや、止める気ないんじゃないかな？

『貴様の涙腺を破壊する！！トラ ザム！！』

「うおおおお！！！」

一方、ハヤテとエ シアの戦いはさらにすごい事になっていた。
機体が赤くなり、残像を残しながら攻撃を仕掛ける。

巨大ロボと、人間が戦っているのに誰も突っ込みなしなのは気にしないでおこう。

「ハヤテくん、もういいよ〜」

「ええ！？でも、蓮さんじゃこれは止められませんよ！？？」

「大丈夫、大丈夫。ここはお姉さんに任せなさいな。こうサクッと、どっかのセイバーみたく17等分にしてあげるから。とりあえず、怪我しないうちに戻ってきて〜」

「で、でも・・・」

「あ、先生の言うこと聞けないの？これは減点をせざるを得ないわね〜」

「ええ！？それは困ります！」

「じゃあ、戻ってきて」

「わ、わかりました」

巧みな話術と言ったところか。

たぶん誰も口げんかで勝てる人はいないだろう。

こんなことを考えながらナギは見守っていた。

ハヤテが戻ってきたのと確認すると、蓮は右手をかざした。頭に疑問符を浮かべているハヤテは無視をして、突然刀を出す。

「今何したんですか!？」

「ん〜?手品？」

「何で疑問形なんですか!」

「気にしな気にしない。さて、さっさと切っちゃおうか雪片」

彼女が持っている刀は「名刀・雪片」

妖刀なのかどうかはわからないが、とりあえずすごいらしい。

『ぜええええいいい!!!!』

「おっと」

ヒラリ、ヒラリと、簡単に攻撃をかわして行く蓮。

この動きは、たぶん損所そこらの、まさしくハヤテ以上の強さを物語っている。

そして、次の瞬間

バラバラ!ドゴオオオオン!!!!!!

クシアが17等分されて大爆発を起こした。

何が起きたかは2人にはまったく理解できていない。

「……紅葉流・『暮桜』」

チンツ、と刀を鞘に納める音がする。
いや、マジで何したんですかあなたは、みたいな目で蓮を見ている
2人だったが、やはり蓮はガン無視。
気にしないのが取り柄なのだろうか。

「さ、帰ろうか」

「は、はい」

「お、おう」

改めて、蓮のすごさを知った2人だった。
おかげでまたさらに蓮の事がわからなくなったんであった。

第03話 さあ、みんなで叫ぼうー！トラ ザムー！！（後書き）

後1話分ぐらいで終わりか、もしくはこれで1日を終わりにするか迷ってます。

後1話追加するなら、夜の話かな？

で、2日目だったらもっとどうしようかなって迷ってます。

しっかり原作の話も入れるつもりですよ？

とりあえずはネタとか思いついた人はメッセージとかください。

出来るだけ本編にねじこみたいと思います。

最後に誤字脱字、感想あればお願いします。

第04話 ナギが羨ましいと感じた男子は俺だけじゃないはず(前書き)

短さは許して下さい・・・。

そしてどうしてこうなったのだろうか・・・。

反省はしているけど後悔はしていません・・・。

第04話 ナギが羨ましいと感じた男子は俺だけじゃないはず

「ん〜！久しぶりに激しい動きした〜！！！」

夜、蓮は三千院家に来ていた。

まあ、いつもの事なのでナギもマリアも気にしていない。
ただ1人、はやてを除いては。

「久しぶりだな、蓮姉と一緒に風呂に入るのは」

「そうね〜、去年はちょっといろいろあったから入ってないわね〜」

ちなみに現在2人は大浴場でくつろいでいる。

無駄に広いこの大浴場で落ちつけるなんてすごいと思う人もいるか
と思うが、これが彼女たちにとって普通なのだ。

「それにしても・・・」

「ん？どうしたの？」

「いや、蓮姉は・・・その、なんで、そんなにおっきいのかなんて・・・」

「・・・え？」

正直意味がわからなかったと言っておこう。
おっきいって何が？

なんでそんなに顔を赤らめてるのかしら？

いじめてくなつてきちゃうじゃない。

「だ、だから・・・その・・・む、胸・・・」

「あ、そう言うこと」

ようやく理解した。

ナギは自分の胸を見て「どうしてそんなに大きいのだろう」と思ったわけだ。

何でかこういう時にいじめたくなっちゃうのは、私の性格上しょうがないことよね 三

「そうね、夜更かししてゲーム見たり深夜アニメ見ているオタクな少女は一生大きくなるわね」

「な!？」

「まあ、一部の人にモテたいんなら・・・このままでもいいかもね?」

ちよんつと、ナギの平たい胸をつつく。

うくん、去年と比べて1.5?しかバストが大きくなってないわね。こういう時は牛乳飲むべきよ。牛乳。

え?なんで触っただけでバストがわかるかって?

それはあれよ、私チートだから。

「むう!蓮姉だからって今のは許せんのだ!!」

「あ、ちよ!ナギ!ダメ!そこは・・・んあ!」

ザバア!と勢いよく立ちあがったナギはいきなり胸をもんできた。

ダメ・・・本当にこれ以上は・・・。

「ナギ・・・ダメ・・・揉んじゃ・・・」

「ダメなのだ！さっきのは許せないからな！」

「わ、わかったから・・・だから・・・やめ　ん！」

「じゃあ、さっきの！」

「取り消すから・・・！だからやめて頂戴・・・」

その言葉を聞くとパツと手を放すナギ。

やばい、なんだかちよつと気持ちよくなってきちゃった。
最近なんだか変ね私。

「ハア、ハア、ハア・・・もう・・・」

「ふんっ！私はどうして大きくなるかと聞いたのにあんなこと言うからだ！」

「素直にゲームとアニメを押さえればいいのに・・・」

「ダメだ！私はあれが無いと生きて行けん！」

「（このダメ発言。ゆっきゅんが聞いたらどうなるのかしら・・・）
」

この後、普通にハヤテの作った夕食を食べて寝た。

今日の感想・・・「疲れたけど楽しかった」by愛沢蓮。

第04話 ナギが羨ましいと感じた男子は俺だけじゃないはず（後書き）

蓮

「愛沢蓮と！」

楚良

「作者の！」

蓮、楚良

「「執事通信！」！」

楚良

「はい、やっと1日が終わりましたね！それとこの執事通信は作品内で1日が終わると使用されるシステムとなっております」

蓮

「あの、さっきのお風呂は・・・」

楚良

「あれはもともと友達と考えた没ネタだったんだがな、俺が使いたかったアイディアだから試行錯誤を重ねて使えるようにしたらあんなだったんだ」

蓮

「なんか私、すごくエロい様に書かれてなかった！？」

楚良

「大丈夫！チートでDSでエロいお姉さんなんて面白そうだから！」

第05話 バカは風邪ひかないと言っけど風邪ひくバカは結構居ると思う

ある日の職員室。

蓮が自分の仕事を淡々とこなしている時だった。

「蓮ちゃん」

「はい、なんですか」

話しかけてきたのは雪路だった。

手は止めず、顔すら向けてないが反応はする蓮。

「あのね、ちょっとだけお金貸してほしいな」なんて

「あ、嫌です」

「え……」

「貸してもいいですけど、ちゃんと返してくれるんですか？まだ貸していた分があったと思うんですが」

「あ、あれ？そうだったっけ？」

「しらばっくれるとキレますよ？在学中に貸した分でも軽く3000万は超えるのに一銭も返してくれてないじゃないですか」

「う……」

「という事なのでお金は貸しません」

その言葉を聞き、雪路は諦めたか職員室を後にする。
やっと行ってくれたかと思いいながら蓮は自分の仕事のスピードを
さらに速めた。

だが、ちよつとすると職員室の戸がガララツと勢い良く開かれる。
入ってきたのは先ほど出て行った雪路だった。

雪路はそのまま再び蓮の元へ行く。

「蓮ちゃん！」

「はい」

「お金貸して！」

「嫌です」

断られるやいなや雪路は職員室を出て行く。

一体なんだったのだと言いたげな顔の蓮だったが気にはしていなかつた。あれが雪路なのだわかっていているからだ。

そしてまたちよつとすると今度は戸が静かに開けられる。
また雪路だ。

今度はとぼとぼした足つきで蓮の元までやってくる。

「蓮ちゃん」

「はい」

「あのね、そのね、うんとね」

「なんですか」

「えっと、お金を」

「貸しません」

「うう・・・」

またもやきつぱりと断った。

これまた雪路はとぼとぼ職員室を出て行く。

本当に何がしたいんだ？と言いたくなっただが面倒なのでやめることに。

それにしても本当に何がしたいんだろうか。

どうせおかねは貸してもらえないのはわかっているのにどうしてだろう。謎は深まるばかりだった。

side out

雨が降ってきた。

あれから雪路はやってきていない。

諦めたのかな？

だがその期待は簡単に裏切られた。

職員室に泥だらけの服で雪路が入ってきたからだ。

「蓮ちゃん・・・」

「どうしたんですか」

「実はね」

〈回想〉

「あ！うっかり転んで服が泥だらけに！どうしよう！私の服はこれしかないのに！（棒読み）」

わざとらしく泥に転んだ雪路。

そして普通に立ち上がる。

特に異常はなさそうだが。

「大変、このままじゃ風邪を引いてしまう！でもお給料日前で新しい買うお金もクリーニング代もないし……（棒読み）」

〈回想終了〉

「　　」といって

「似合ってますよ？」

「でも風邪を」

「桂先生みたいなバカは引きませんから安心して下さい？」

「それでもお金」

「いい加減にしないと先生をクビに追いこみますよ？」

この言葉を聞いて蓮からお金を借りるのを諦めた雪路だった。

side out

「綾崎君」

「あ、桂先生。どうしたんですか、そんなに泥だらけで」

「実はね 省略 というわけでお金貸して」

「ああ、それは大変ですね。ではこのお金を っ嫌ですよ！僕もお金持つてませんし！先生に貸したら返ってこないじゃないですか！」

「いいじゃんいいじゃん。今貸しとけば内申点あげておくから」

「いりません！」

雪路は蓮からお金を借りることをあきらめたが、お金を借りることは諦めてはいなかったようだ。

そして最初のターゲットがハヤテである。

何とも不運なことだろうか。だがこれがハヤテなのだ。気にしたら負けである。

一方蓮の方では。

生徒会の顧問をやっているため、ヒナギクのと一緒に居た。

現生徒会長と元生徒会長。何とも絵になる風景だ。

「で、桂先生がしつこくて」

「私からも言っておきます。というかお姉ちゃん、蓮さんが在学中の時にもお金借りてたんだ・・・」

「1ヶ月に9万位は持つてかれてたかな。私がお金持ちの家になかったら、どうする気だったんだか」

そんな話をしている時だった。

向こう側からハヤテと雪路の声が聞こえてくる。

蓮は耳を澄ませてみた。

「お金貸して！」

「嫌ですって！」

あの人、私から取るのをあきらめて生徒に手を出したか。

よし、ちよつと懲らしめるついでにハヤテ君を助けてあげよう。

「桂先生」

「げっ、ヒナに蓮ちゃん！」

「げっ、とはなんですか。あなたって人はまた性懲りもなく」

「お姉ちゃん！人からお金借りるのはあれほどダメって言ったでしょ！それに綾崎君はあんまりお金持ってないんだから考えてあげてよ！」

「うう・・・だって、お給料日前にもう全部使っちゃったから・・・」

「
「なら副業でバイトでもすればいいじゃないですか。キリカさん達には私から黙ってあげますから。それと、バイト代の1割でもいから私に渡して下さいよ。在学中に貸した300万、まだ返してもらってませんかからね」

「は、はい・・・」

反省したか、顔をそむけた雪路。

うん、まいつか。

どうせ長続きしないのはわかってるし。

「ハヤテ君も、しっかり言わないとダメよ。この人お金には目が無いから」

「わ、わかりました」

「じゃ、私達は行きましようか」

「そうですね。お姉ちゃん、わかった？」

「わかったからそれ以上言わないで！」

反省した（？）雪路とハヤテと別れ、2人はその場を後にしたのであった。

第05話 バカは風邪ひかないと言っけど風邪ひくバカは結構居ると思っ(後書

なんか今回は蓮さんのドSさと天然さを出せていなかった気がする。

まあ、しょうがないか・・・。

この小説では「こんな展開がほしい!」とか、「アイデア、ネタが思いついた!」って人の意見を可能な限り本編にねじこみたいと思っっています。

なのでネタとかアイデアが浮かんだ人は遠慮なく言ってください。上に書いた通り可能な限り本編にねじ込みたいと思っいます。

最後に誤字脱字、感想あればお願っします。

第06話 幽霊退治？いえいえ、ただのマジバトルですよ（前書き）

今回はついに蓮さんと契約（？）している英霊のヒントが現れます。

さらにはマジバトル開始。

蓮さん本気で遊んじゃいますw

第06話 幽霊退治？いえいえ、ただのマジバトルですよ

「へー、今年はやるのね。マラソン自由型」

生徒会室でヒナギクといた連は手元にある今後の予定表を手に持ちつぶやいた。

白皇学院五つの伝統行事の一つ、マラソン自由型。今年は理事長の意向により復活したようだ。

このマラソン自由型。

内容は、以外にも簡単に敷地内を一周するだけ。だが、この敷地内一周がいろんな意味で地獄なのだ。

ご存知の通り、白皇学院の敷地は東京都の杉並区ほぼ全域。賞金500万といった豪華といえば豪華なものがあるが、優勝はあろうか、完走することすら難しいだろう。

まあ、この話はおいておこう。

おいておいても最終的にはまた浮かんでくることなのだから。

「蓮さんたちのころってやんなかったんですか？」

「うん。まあ、やらないって知って喜んでる生徒のほうが多かったけど。私は面白そうだからやりたかったんだけどな」

「じゃあ、今年は」

「もちろん参加するわよ。全部」

在学中に参加できなかった蓮は意外なまでに楽しみにしている。五つある伝統行事が四つになってしまったのだ。それほど楽しみにしていたのだろう。

(楽しそうですね)

不意に蓮の頭の中で声が響く。

その声で少し驚いてしまい、後ろを振り向くが誰もいなかった。

「どこかしましたか？」

「え？ああ、いや、なんでも。気のせいだったみたい」

向き直った蓮は誤魔化しを入れた。

本当は気のせいでもなんでもなく、知ってる声だったからだ。

(いきなり声かけないでくれる・・・?)

(すみません、つい。ですが、あなたのがんなに楽しそうな顔を久しぶりに見たので)

少し怒り気味な蓮。

ちよっとおかしなところをヒナギクに見せてしまったので怒っているのだろう。

話し相手はとある”英霊”で、姿を隠している。

というか、その”英霊”は実体なんて持っていない。

”英霊”なんてものはみんなそんなもんらしいが、本当かどうか定かではない。まあ、今まで見たことないだけで実体を持つてるものもあるかもしれないが。

「さ、ちゃっちゃと仕事終わらせて帰りましょ」

「はい」

side out

時間は過ぎて夕方。

生徒会の仕事は途中、愛歌と千桜がきてちよつと楽になった。何とか夕方までに終わらせ、無事今日の仕事は終了した。

「じゃ、帰り気をつけてね。まあ、ヒナギクは関係ないと思うけど」

「え！？それどういう意味ですか!?!」

「だってヒナギク強いじゃない。どこからともなく竹刀取り出せるし」

「そういう蓮さんは刀を取り出すじゃないですか」

「ニコ）あ、違った。胸がない子は襲われにくいっていったほうがよかったわね」

ぐさり!!

ヒナギクは精神に999のダメージ!!

ヒナギクのライフはもう0だ!!

蓮に言葉で勝つのは簡単そうで難しい。

やろつとすれば逆にえぐられること間違いなしだろう。
現にヒナギクは落ち込んでしまっている。

「まあ、2割ぐらい冗談だから気にしなくてもいいわよ」

「2割も本気じゃないですか！」

「あ、元気になった。ならもう大丈夫ね」

言葉がうまい。言葉で立ち直らせることもできる。

そこらへんもしっかり考えて発言をしているので、蓮はやっぱり頭がいいといえる。

ヒナギクがこう返してくるのも予想済みだ。

どんなときでも楽しむのが優先である。

とにもかくにも、3人を見送った後、何も用事がないことを確認し、蓮も帰宅することにした。

「ただいま」

「お帰り、姉ちゃん」

今日は三千院家ではなく、自宅愛沢家に帰宅。

出迎えたのはお笑い命の愛沢家次女、咲夜だ。

そしてその後ろに咲夜よりも小さい弟と妹が2人。

今は姿が見えないが、実はその下にさらに2人妹がいる。

隠し子であるギルバートも合わせ、合計で7人姉妹（兄妹）だ。
家族の女率が多く、父親の立場が危ういとか何とか。

最近では蓮にすら頭が上がりず、マジでやばいそつだ。

「お帰りなさい、お姉さま」

「伊澄、きてたんだ」

「はい。それと今夜、少し手伝ってもらいたくて」

「あゝ、了解とらいつてだから」

（わかりました。ですが、無茶はしないでくださいね）

（わかってるって）

「さて、夕食の準備しましょ。咲夜、手伝って」

「了解や！」

家での食事は基本蓮か咲夜が作る。

悲しいことに母親は料理の腕が自分の娘2人に負けているせいで絶賛挫折中。別に作らない、というわけではないがやはりおいしいものを食べたいのでいつもこの2人に任せているのだ。

「さあーで、今日は何を作ろうかな」

side out

同日夜中。

現在の時刻は深夜0時を回ったところだ。

「で、今日はどんなのが相手？」

「成仏できていない霊を2体と、少し厄介なものです」

「私はその厄介なやつを相手をつてことね」

「はい。お願いします」

英霊の力を使える蓮。

伊澄はよく、こういった自分の仕事を手伝ってもらうことが多い。

蓮本人もいやとはいっていない。

むしろ楽しんでやってるくらいだ。

「ねえ、伊澄」

「はい」

「思ったんだけど、目の前のあのお侍さんが厄介なやつ？」

暗がりに怪しい光をかもし出している侍が一人。

しかもご丁寧に鎧に兜、籠手に刀まで持っている。

こんなのどう見てもやばい系か、侍オタクくらいだろう。

襲ってこないうちに、どう対処するか話し合う蓮と伊澄。

だが、話し合いが終盤に差し掛かったときだった。

「っ！！!?」

さっきまでだんまりだった侍がいきなり襲い掛かってきた。狙いは伊澄ではなく、蓮。

とっさのところでは雪片を出して、防いだが、それが仇になった。

『貴様、なぜ雪片を持っている』

「へ？え、いや、これは、私のだけど・・・」

『問答無用！！』

有無を言わずさらに切りかかってくる。

刀同士がぶつかり合う音は高く、夜空に響く。

この侍は相当のてだれということがすぐにわかった。

(蓮、いったん場所を移しましょう。ここでは少々部が悪い)

「少々どころじゃないって、これは。こんなところじゃ”カリバーン”だって振り回せないわよ」

(なら、いったん後ろに下がってください。そこからさらに左の道にそれてください。今のあの侍なら必ず追ってきます。森のほうまで誘導を)

「わかった、道案内よろしく。伊澄、後は自分で何とかして。これは私が何とかするから」

「わかりました」

頭の中での会話を声に出してしまふ。

伊澄は蓮の英霊の存在を知っているからこそ声に出せたのだ。

そのご、巧みに攻撃をかわしながら森へ逃げる。

暗い夜の森はむしろ危険じゃないかと思うが、あの侍は自分が光を出している。

つまりは暗がりでも姿が確認できるので（蓮なら）大丈夫ということだ。

『む、諦めたか』

「まさか。ここからが本番よ」

雪片をしまい、今度はどこからともなく青色の鞘を取り出した。

明るい光を出す鞘から、一本の剣を引き抜いた。

「久しぶりにこれ使うんだから、楽しませて頂戴ね」

第06話 幽霊退治？いえいえ、ただのマジバトルですよ（後書き）

次回、マジバトルから始まります。

蓮さんと契約した英霊、わかりましたよね？

鞘と剣も、わかりましたよね？

ちなみに、蓮さんはチートなので鞘とあの剣以外に、後3本所持してます。

勘が良い人はすぐにわかるはず。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第07話 何か後半キャラ紹介っばいけど許してね キラ ミ(b y 蓮)前書き

今回は本編で蓮さんの宝具を全部紹介しちゃいます！

第07話 何か後半キャラ紹介っばいけど許してね キラ ミ(b)蓮

「ここからは本気で行くわよ」

蓮が引き抜いた剣の名は『カリバーン』

『勝利すべき黄金の剣』ともいわれる選定の剣だ。

一振りで敵軍をすべて打ち倒したというエピソードもあり、騎士王『アーサー・ペンドラゴン』が愛用する剣としても有名だろう。

なぜ蓮がそんな伝説の剣を持っているのだろうか。

それは彼女が契約した英霊のおかげだ。

英霊の名は『アーサー・ペンドラゴン』

持つ宝具はカリバーンをあわせて7つ。

4本の剣に鞘が2つ、そして銃が一丁。

そのうちのひとつがカリバーンということだ。

「お待さん、覚悟はできて？」

『負ける気など毛頭ない』

「そりゃ結構。なら、ちゃんと”遊び”に付き合ってね」

蓮がいい終わった刹那。

刀と剣がぶつかり合う音が響いた。

片手にカリバーン、もう片方に青い鞘『アヴァロン』を持つ蓮は笑顔だった。

こういつた戦いは楽しい。

若干どころかのバトルマニアっぽくなってるが、まだ全然本気を出していないし、ぶっちゃけてしまえばまだ半分ぐらいしか出してない。

『紅葉流・・・『暮桜』！！』

「いつ!？」

繰り出された技は自分がよく知る技。

それはまさしく紅葉流で蓮が一番最初に習得した技で、彼女が一番思い入れのある技だった。

不意打ち、というわけではないが動揺していた。

一瞬の隙を突かれ、蓮は刃の餌食となる。

はずだった。

『なに!？』

突如、まばゆい光が蓮を包み込んだ。

蓮の周りには光り輝く”何か”があり、それは次第に集まり鞘の形へなっていく。

「あつぶなく。アヴァロンもってなきや死んでたわこれ」

宝具『全て遠き理想郷』
アヴァロン

その能力は最強の守り。

さらには所持するだけで治癒能力などを高めたりもできる。

先ほど蓮の周りに浮いていたのはアヴァロンのパーツである。

それら全てが物理干渉などを遮断して蓮を守ったのだ。

「まさか相手が紅葉流の人とは・・・私、ご先祖様と戦ってたのね。道理で動きが見たことあると思った」

『貴様、何者だ・・・？』

「紅葉流第49代目後継者、紅葉蓮。今は愛沢蓮と名乗らせてもらってるわ」

『・・・お前が、か』

「がっかり？」

『いや、むしろ逆だ。これでこそわざわざ戻ってきてまで後継者を見に来たというもの。安心して上へ逝ける』

警戒態勢を解いた侍。

紅葉流の人間であることは確かだが、いつの時代かはわからない。たぶんだが創設者で、1代目だろう。

蓮もアヴァロンにカリバーンを収め、もう一度雪片を取り出す。

黒い鞘に収まっている雪片を居合いの構えに持っていく。

「最後になにか？」

『何もなし』

「わかりました。紅葉流」

ぐっ、と足に力を要れ、一気に踏み込む。
抜いた刀を再び、鞘に戻し、チンツと音がした。

「『紅椿』・・・」

side out

翌朝。

今日は休日の土曜日。

昨晚、蓮は伊澄の家に泊まったようだ。

「おかわりをお願いします」

朝食、和服姿のアーサーは5杯目のご飯を受け取っていた。
英霊である彼女は鷲ノ宮家でのみ自身の体を実体化させることができるところである。

別にここ以外じゃ実体化できない、というわけじゃない。
ここなら気兼ねなくすごせるからだ。

「ホント、よく食べることですね。腹ペコ王は」

「腹ペコ王とは何ですか。それに腹が減っては戦はできぬ、です」

「動くのは私なんだけどな」

食事を取っているアーサーと、縁側で宝具を眺めている蓮。
ちようどいいので、蓮の所持している宝具を簡単に説明しよう。

一つ目。

これは昨晚使った剣『カリバーン』または『勝利すべき黄金の剣』
身体能力強化などの能力を有しているが、逆に言くとそれしかない。
斬撃を飛ばすなんてことができないため、汎用性は低い。

二つ目。

『エクスカリバー』または『約束された勝利の剣』
これもアーサーが使っていた剣。

元々は折れたカリバーンの破片を使って鍛えられた聖剣だ。
本当ならカリバーンと一緒にあるはずはないのだが、蓮と契約した
らなせか手元にあったらしい。

カリバーンとアヴァロンの3つそろってほかの3つの宝具の力を抑
える効果がある（これは結構重要）

三つ目。

『エクスカリバー』または『約束された勝利の剣』

こちらは上記のものとは違い、黒い。というか漆黒。

別名『黒カリバー』と『エクスカリバー・モルガン』

どこから来たのか、いつのものなのかはまだわからず、わかること
はどこかの世界でアーサーが使っていたということだけ。

手元にかリバーンとエクスカリバーがなくなると使用者である蓮の
口調は毒舌と化す（剣の影響で）

四つ目。

『エクスカリバー・ガラティーン』または『転輪する勝利の剣』

元々は円卓の騎士ガウエインの剣。蓮に惹かれてどこからかやって
きた。

忠義の剣とも呼ばれ、モルガンと同じ状況になると口調が丁寧にな
ったりする。

柄の部分に擬似太陽が内蔵されていて、もうひとつの星の聖剣とも呼ばれている。

五つ目。

『アヴァロン』または『全て遠き理想郷』

これも昨晚使用したものの。最強の守り。

数百のパーツに分かれて使用者を守ったり、所持しているだけで治癒力を高めたり、老化を遮断したりなどの効果がある。

破損した剣を収めると修復機能が蓮と契約したことにより追加された。

六つ目。

『インビジブル・エア』または『風王結界』

基本はエクスカリバーを収めるのに仕様。

使うと剣を不可視にすることができる。不意打ちにはもってこい。

七つ目、最後。

『ジャツジメント』または『断罪者』

いつの時代、どこで誰が何のために作って使用したか不明の黒い銃。オートマチックとリボルバーをあわせた奇妙な形をしており、打てば目標にあたるまで絶対にとまらない追尾性能をもつ。

これもガラティーンと同じように蓮に惹かれてどこからかやってきた。

蓮いわく「朝起きたらあった」らしい。

以上、七つの宝具をもつ蓮。

こんなにあつても自分が本気になるなんてありえないな、とため息をついてから苦笑いする。

首から提げてた王玉を見て、また苦笑い。

まったく、どうしてこんなことになったのか。
自分の運の悪さがたまに泣けてくる。

「ねえ、アーサー」

「はい、なんですか？」

「私って……ううん、やっぱりなんでもない」

「そうですか。何か悩み事なら、またいつでも」

「ありがとう。それとさ」

「はい」

「一人で釜のご飯全部食べるのはちょっとないんじゃないの？私、
まだ朝ご飯食べてないんだけど」

「食べないのが悪いです」

「……太るわよ」

その瞬間、アーサーはビクッと反応したのだった。

蓮

「愛沢蓮と！」

楚良

「作者の！」

蓮&楚良

「「執事通信!!!」」

楚良

「はい、今回は蓮さんの宝具紹介でした」

蓮

「まさか説明以上であんなに文字数稼ぐなんて。あきれたわ」

楚良

「それはそうと、今回はちょっとした発表が」

蓮

「軽く流された。ま、いいや。なに？発表って」

楚良

「蓮さんのICVが決定!!!」

蓮

「うそ!? ホント!?!」

楚良

「いや、マジ。数人ぐらい案が出てたがついに決まったさ」

蓮

「おお！では、発表どうぞ！」

楚良

「坂本真綾さんです！」

蓮

「ほほう」

楚良

「ノリ的にもあってると思ったしな。まあ、あくまでイメージだから」

蓮

「ん〜、でもそついつのって想像してもらつといいわよね」

楚良

「ということだ。今回はここら辺で終わりにしよう！」

蓮

「はいはい。では次回、また会いましょう！」

第08話 マリアさん、お姉さんキャラ没収です（前書き）

なんとなく書いていたらこうなりました。
タイトル通りといえはタイトル通りなはず。
とりあえず蓮さんの笑顔に気をつけよう。

第08話 マリアさん、お姉さんキャラ没収です

日曜。

それはある者にとっては至高の一日。

日曜。

それはある者にとっての地獄の一日。

日曜。

それは朝の仮面ライダーフーズやワン・ピースを見終わると「日曜の楽しみはもう終わりかあ」と呟きたくなる何ともせつない一日。

日曜。

それはサザさんやチビ子ちゃんが終わると「ああ、これで日曜も終わりかあ」と思えてしまう何とも微妙な一日。

そんなわけで今日は日曜日だ。

ぶっちゃけ今の時間は10時を過ぎているので朝の楽しみはすでに終了している。

アーサーは伊澄と一緒にゴーイジャーやオーゼを見てる。

まあ、腹ペコ王は基本自由なので暇つぶしとしてもだ。

ただどたまに実体化して戦闘を手伝ってくれる時などにネタを使うのでやめてほしかったりする。

「さて、今日はどうしようかしら」

特に用事というものもなく、やることもない蓮。

家にいてもほぼ毎回弟と妹の相手をする羽目になる。別にかまわないが最終的には飽きてしまう。

父親は絶賛爆睡中。

やっぱり日曜日のお父さんはこれが定番なのだなと改めて思い知らされる。

母親は・・・どこに行ったかは不明。

ぶっちゃけあんまり見かけないから心配している。

咲夜はたぶんナギの家だろう。

どうせワタルや伊澄たちと楽しくやってるはずだ。

学校に行ってもいいけど、やることは生徒会の仕事だけだろう。

そして絶対いるはずのヒナギクと談笑して一日が終了すると思う。それじゃさすがに面白くない。

そうとわかれば行く場所はもう決まったようなものだ。

家つまらなく、学校もちよっと遠慮したい。

ならば三千院家に遊びに行こうとなった。

side out

「何この状況」

三千院家について第一声がこれ。

状況的には咲夜とハヤテがなんでか漫才中。

伊澄、ワタル、ナギ、マリアが観客だ。

「おわっ！姉ちゃんいつの間にも！」

「私には超神出鬼没というライセンスがデフォルトで備わっていて常に発動しているのよ。ちなみにon/off可」

ワタルは大いに驚く。

伊澄は普通。マリアも普通。

蓮は全然楽しくない。

こう言うときは

いじりやすいワタルをいじった方が楽しそうだ。

「ワタル、たまにはお姉ちゃんって呼んでいいのよ」

「呼ばねえよ。バカじゃねえのか？」

「あ、そんなこと言うんだ。じゃ、今度サキさんにワタルが「わーわー！！言うのやめて！！」　ふふ、冗談よ。というか何を言うかまだ言っていないんだけど、何を言わないでほしいのかなあ？」

「のおおおおお！！！！」

やっぱり男の子はいじりやすく楽しい。

ワタルなんか完璧に墓穴を掘ってしまったている。

DS精神のもとワタルをいじりまくる。

ハヤテ君はいろいろといじると楽しいけど、ワタルもワタルでいじったら楽しいわ。特にサキさんならみで。

蓮のチートな情報網をなめてはいけない。

携帯一つあれば即座に大量の情報を得られるほどだ。

まあ、一番の情報源は暇つぶしでワタルの家に仕掛けた監視カメラだが。

「あ、蓮さん。いつの間に来てたんですか？」

「さっき。いやあ、ワタルとか年下の子弄るの楽しいわねえ」

「そうですか。でもかわいそうだからやめてあげ　「何言ってるの？ハヤテ君も年下だよ？」　あ・・・」

蓮の前で他人の心配なんかしてはいけない。

していたら自分がやられてしまう。

警戒心を十分、いや十二分にしなければ大変なことになるのだ。

そんな中、蓮がちよっぴりてこずる相手が一人。

手が滑りやすい（自称）ぴっちぴちの18歳、メイドの MARIA だ。

「でも MARIA は年下ってあんま思えないんだよね」

「そんなこと言いながら呼び捨てじゃないですか。それに1歳違いですし、年下とかあんまり関係ないんじゃない」

「細かいとこ気にしてる辺り、やっぱり年下って思われたくないんだ。そんなこと考えてたり言ったりしてる老けるわよ？」

グサリ！！

MARIA の精神に1000ポイントのダメージ！！

MARIA の体力はもう少ししかない！！

口は災いのもと。

蓮の前での迂闊な発言は命取りなのだ。

マリアもしまったと思いつつもダメージに耐える。

この状況、一歩間違えればハメられるかもしれないのに立ち向かうところを見るとお姉さんキャラを取られたくないという意地なのだろうか。

諦めて退けばいいのにも思いつつも誰も口出しできない。

なぜなら・・・

()()(姉ちゃん(蓮姉)(蓮さん)の笑顔が怖い)()()

ナギ、ハヤテ、ワタル、咲夜の心の声。

一方蓮は先ほどから物凄くニコニコしている。

久しぶりに楽しくなってきたので笑顔が絶えないのだろう。

早くおしゃべり(トラップ)を再開したくてたまらない。

というか伊澄はどこへ消えた。

「あ、そろそろお昼みたいね。昼食私作るっか？」

「あ、それなら僕が」

「ん〜、じゃあ、手伝ってくれない？それだったらおいしいのたくさん作れるでしょ？」

「え、あ、はい」

蓮が運よく腕時計を見たことが(みんなにとって)功を奏した。ハヤテに連れられ蓮はキッチンへ向かう。

この状況でなぜかマリアだけ忘れ去られていたのは天の声（作者）の秘密だ。

side out

「えっとね、これにこれを付け足すと・・・」

「うわっ、すごいですね！こんなの初めて知りました！」

「でしょ？お姉さんは物知りなんだよ。他にはこれとこれを・・・」

キッチンにて。

マリアの場所（お姉さんキャラ）が盗られていた。

「あれ？マリア、どしたの？」（ニヤリ）

「なんでもありません」

第08話 マリアさん、お姉さんキャラ没収です（後書き）

蓮「蓮と！」

楚良「作者の！」

蓮&作者「執事通信！」

蓮「あれ？二回連続？」

楚良「もう、一日のことを数回に分けて書くのは諦めました、はい」

蓮「まあ、それならそれで読みやすいしね。ま、いいんじゃない？」

楚良「まあ、分けて書くときは分けて書くと思う。とりあえず執事通信はほぼ毎回あります」

蓮「それにしても、今日はホント面白かったわ！なんていうの仮面ライダーオーの最終回でタジドルコンボが復活してくれた感じかしら」

楚良「え、えつと・・・た、例えがわからない。マニアックすぎる」

蓮「とにかく楽しかったの！マリアってあんまり私のトラップに引っかかってくれないから最近詰まんかったけど、久々だと楽しさ倍増ね！」

楚良「さっきから蓮さんのテンションがハイな上に笑顔だ。うん、迂闊な発言はしないようにしないと」

蓮「次回の予定は？」

楚良「特になしです。ネタがあればすぐに更新できるけどなければ不定期になるかと。あ、感想とかでネタくれれば本編にねじ込みながら死ぬ気で考えま　「とりあえず、長いのは面倒だからカット」

のおおおお！！！！」

蓮「じゃ、読者のみなさんまた次回！感想でネタを書いてくれると作者が無理やり本編にねじ込んでうわよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0569t/>

ハヤテのごとく! チートでDSなお姉さん

2011年10月8日10時39分発行